カ　入力レベル　　最大のダイナミックレンジとなる値
キ　データ点数　　400点以上
ク　掃引モード　　連続掃引
ケ　検波モード　　ポジティブピーク
コ　表示モード　　マックスホールド
サ　掃引回数　　スペクトラムの変動が無くなる程度の回数

3　試験機器の状態

五の項の３に同じ。

4　測定操作手順

⑴　中継周波数が２波以上の場合

信号発生器１及び２とも規定の入力レベル－３dBとなる値にし、試験機器の出力が最大になるように設定する。

⑵　搬送波電力（P_c）の測定

ア　スペクトル分析器の設定を２⑵とし、送信周波数帯域内の割当周波数の中心周波数を中心周波数にして掃引する。

イ　全データ点の値をコンピュータの配列変数に取り込む。

ウ　全データについて、dB値を電力次元の真数に変換する。

エ　全データの電力総和を次の式で求める。ただし、参照帯域幅内のＲＭＳ値が直接求められるスペクトル分析器の場合は、測定値とすることができる。

$$P_c=\left(\sum_{i=1}^{n}E_i\right)\times\frac{S_w}{RBW\times n}$$

P_c　　：各周波数での掃引周波数幅内の電力総和の測定値（W）
E_i　　：１サンプルの測定値（W）
S_w　　：掃引周波数幅（MHz）
ｎ　　：掃引周波数幅内のサンプル点数
ＲＢＷ：分解能帯域幅（MHz）

⑶　上側隣接チャネル漏えい電力（P_U）の測定

ア　スペクトル分析器の設定を２⑵とし、P_Uを測定する場合は送信周波数帯域上端から＋2.5MHzを中心周波数にして掃引する。

イ　全データ点の値をコンピュータの配列変数に取り込む。

ウ　全データについて、データ点ごとにdB値を電力次元の真数に変換する。

エ　真数に変換したデータについて、3.84MHzのＲＲＣフィルタ（ロールオフ率0.22）の特性により各データを補正する。

オ　全データの電力総和を⑵エの式で求め、P_cをP_Uと読み替える。

カ　スペクトル分析器の設定を２⑵とし、送信周波数帯域上端から＋7.5MHzを中心周波数にして掃引し、終了後イからオまでの手順を繰り返す。

⑷　下側隣接チャネル漏えい電力（P_L）の測定

ア　スペクトル分析器の設定を２⑵とし、送信周波数帯域下端から－2.5MHzを中心周波数にして掃引する。

イ　全データ点の値をコンピュータの配列変数に取り込む。

ウ　全データについて、データ点ごとにdB値を電力次元の真数に変換する。

エ　真数に変換したデータについて、3.84MHzのＲＲＣフィルタ（ロールオフ率0.22）の特性により各データを補正する。

オ　全データの電力総和を⑵エの式で求め、P_cをP_Lと読み替える。

カ　スペクトル分析器の設定を２⑵とし、送信周波数帯域下端から－7.5MHzを中心周波数にして掃引し、終了後イからオまでの手順を繰り返す。

⑸　割当周波数の下限周波数と上限周波数測定の場合

ア　信号発生器１を送信周波数帯域内の割当周波数で最も高い周波数、規定の入力レベルとし、信号発生器２をオフとする。試験機器の出力が最大になるように設定し、⑵及び⑶の測定を行う。

イ　信号発生器１を送信周波数帯域内の割当周波数で最も低い周波数、規定の入力レベルとし、信号発生器２をオフとする。試験機器の出力が最大になるように設定し、⑵及び⑷の測定を行う。

5　試験結果の記載方法

４で求めた結果は、次の式で計算しdBで記載する。

⑴　上側隣接チャネル漏えい電力比　$10\log(P_U/P_c)$

⑵　下側隣接チャネル漏えい電力比　$10\log(P_L/P_c)$

また、絶対値を求める場合は、あらかじめ測定した空中線電力の測定値に⑴又は⑵の比を用いて算出しdBm／3.84MHz単位で記載する。

6　その他の条件

⑴　２⑵において、信号発生器の変調出力として、全サブキャリアが同時に送信する状態（運用状態で電波を発射しないサブキャリアを除く。）であって、バースト時間内にサブキャリアの送信が停止しない条件及び直接拡散方式の連続送信状態で測定する場合に限り、検波モードをサンプル又はRMS、表示モードをRMS平均とすることができる。

⑵　各隣接チャネル漏えい電力を求める場合は、送信信号を直接サンプリングして取り込みFFT処理により周波数領域に変換する。

⑶　標準信号発生器は帯域内の上限及び下限割当周波数に対応した２台を用いることとしているが、上限及び下限割当周波数の変調信号を同時に出力できる標準信号発生器を用いることができる。

八　隣接チャネル漏えい電力（上り）

1　測定系統図

七の項の１に同じ。

2　測定器の条件等

七の項の２のほか、次のとおりとする。

⑴　１MHz（100kHz）帯域幅当たりの隣接チャネル漏えい電力探索時のスペクトル分析器は、次のように設定する。

ア　掃引周波数幅	測定操作手順に示す周波数幅
イ　分解能帯域幅	815MHz以下又は845MHzを超える領域：１MHz 815MHzを超え845MHz以下の領域：100kHz
ウ　ビデオ帯域幅	分解能帯域幅と同程度
エ　掃引時間	測定精度が保証される最小時間
オ　Ｙ軸スケール	10dB／Div
カ　入力レベル	最大のダイナミックレンジとなる値
キ　データ点数	400点以上
ク　掃引モード	単掃引
ケ　検波モード	ポジティブピーク

⑵　１MHz（100kHz）帯域幅当たりの隣接チャネル漏えい電力測定時のスペクトル分析器は、次のように設定する。

ア　中心周波数	測定操作手順に示す周波数
イ　掃引周波数幅	０Hz
ウ　分解能帯域幅	815MHz以下又は845MHzを超える領域：１MHz 815MHzを超え845MHz以下の領域：100kHz
エ　ビデオ帯域幅	分解能帯域幅の３倍程度
オ　Ｙ軸スケール	10dB／Div